

甲子 乙丑 戊戌 己未 甲戌
 甲辰 乙巳 甲寅 乙未 己未 甲戌
 戊午 己未 卯日

〔日次紀事 正月〕二日 角倉船乘初 於前川浮船而祝之

○按ズルニ、船乘始ノ事ハ、歲時部年始雜載篇ニ在リ、

〔御船御乘初記 附錄 舊記抄出〕

慶長六年辛丑一豐公略中正月八日、浦戸に御著、此日を御吉例として、毎年御船の乘初被成候也、

慶長六年正月八日、浦戸御入城之日、御吉例御坐御船御乘初、正月八日に被仰付候事略中

万治二年正月八日、如御嘉例、御船御乘初に付、櫃屋道清より、高麗くるみ曲物壹かすていらはな

ぼう曲物壹かせいた曲物壹、高麗松子曲物壹、こんべいとふ曲物壹、あめんどふ曲物壹、氷ざとふ

曲物三ツ差上ル

〔古事記中仲哀〕爾建内宿禰白略中今如此言教之大神者、欲知其御名、即答詔、是天照大神之御心者亦

底筒男、中筒男、上筒男、三柱大神者也略注今寔思求其國者、於天神地祇、亦山神、及河海之諸神、悉奉

幣帛、我之御魂坐于船上、而眞木灰納瓠、亦箸及比羅傳略注多作、皆々散浮大海、以可度、故備如教覺

整軍雙船、度幸之時、海原之魚、不問大小、悉負御船而渡、爾順風大起、御船從浪、故其御船之波瀾、押騰

新羅之國、既到半國、

〔日本書紀九神功〕明年元攝政二月、廣坂王、忍熊王略中乃伴爲天皇仲哀作陵、詣播磨、與山陵於赤石、仍

編船、緇于淡路島、運其島石而造之、

〔大鏡三太政大臣賴忠〕ひととせ入道殿藤原道長大井川の逍遙させ給しに、作文船、管絃船、和歌船と

わかたせ給て、その道にたえなる人々をのせさせ給しに、此大納言殿藤原公任のまいり給へるを

入道殿、かの大納言、いづれの船にかのらるべきとの給はすれば、わかふねにのり侍らんと